経営協議会の学外委員からの意見を法人運営の改善に活用した主な取組事例
（平成３０年度）

平成３０年度の経営協議会における学外委員からの意見を、法人運営の改善に活用した主な取組事例は下記のとおりである。

記

（学長より、今後の大学経営に係る検討事項のひとつとして、大企業の幹部候補生を対象としたエグゼクティブプログラムの実施や、本学名誉教授等の人間国宝の方々をシリーズ化で学生対象に講座を持っていただき外部の方々にも有料にて参加できる仕組みを考えている、との説明をし、学外委員の方々の意見を伺った）

〇エグゼクティブプログラムについては、「藝大塾」的なものかと思慮するが、充実した内容（ カリキュラム） や対象者等を詳細に検討していく必要がある。

〇藝大でなければできないようなカリキュラムを提案していただきたい。

（平成３０年６月２８日　第６４回経営協議会）

（企業人を対象とした「東京藝術大学出前講座」の開始）

令和元年度に、「日本人が歴史のなかで育んできた豊かな芸術と文化の力」を基底にして、「今日からあなたも藝大生！」「これからの企業経営にはARTが必要」を旗印に、ビジネスの最前線で活躍する企業人を対象にした、日本文化から発信される社会人啓発プログラム「出前講座」を開始した。

その一環として、令和元年７月から令和２年１月にかけて、会員制の企業人向けの私塾であるシリウス企業倫理研究会と連携し、「InnovationはArtから」「Digitalが開く文化資源活用の未来」「能に学ぶ」等をテーマとした全５回の講座を帝国ホテルにおいて開催した。

〇文化芸術外交という分脈を基に様々な案件を検討されてはどうか。

（平成３０年１０月２５日　第６５回経営協議会）

（ASEAN諸国および中東諸国との交流プロジェクトの実施）

令和元年５月、アウンサンスーチー国家最高顧問の指示により日メコン交流年事業としてミャンマー政府が企画した、展覧会「Beauty of Mekong」に本学美術学部及び映像研究科が誘致を受け、漆芸作品およびメディアアート作品を展示した。同展覧会のオープニング式典には、ミャンマー政府の宗教・文化大臣を筆頭に、メコン諸国以外からもシンガポール大使が出席するなど各国外交団の姿も多数見られたほか、現地メディアも詰めかけ、広く報道された。

令和元年７月には、トルコの大学との交流事業に関する総括シンポジウムを東京大学・東京工業大学・福島大学・新潟大学・東京藝大の合同で開催した。本学は、これまでの交流事業に関して、アナドール大学のEmel ŞÖLENAY教授、藤原信幸教授、および交流授業に参加したアナドール大学卒業生や本校学生による発表と展示を実施した。

○　藝大は日本の大学の中でも様々な活動でグローバル化（ 海外関係機関との交流等） を推進されているが、一方でＳ Ｇ Ｕ 予算等が削減傾向となっていることについて、藝大が先頭に立って芸術・文化の必要性を強く要求していただきたい。

○　「日本博」は異文化交流の面も必要であると思われるため、留学生を活用した企画を提案願いたい。

○　オリ・パラや日本博への参加も重要だが、本来の藝大の方向性を見失わないようにしていただきたい。

（平成３１年１月３１日　第６６回経営協議会）

（東京藝大「I LOVE YOU」プロジェクトの開始）

令和元年度、人工知能やロボットなど、科学技術が急速に発展する現代社会において、芸術の役割・あり方や新しい可能性を示すため、「人が芸術を作るのではなく、芸術が人を生み出す」という意識から『芸術は人を愛する』をキーワードとした『東京藝大「I LOVE YOU」プロジェクト』を新たに開始した。

プロジェクトでは、芸術が社会の基盤として人に豊かさをもたらすことや、科学・医学・福祉などと結び付き新たな価値を生み出すことで社会を変え、問題を解決できることを、実践によって示し、社会に伝えていく。大学として10件程度の中核企画を実施するほか、学内公募により学生等からも提案を募り、100件の申請の中から優れた企画を約50件選出(外国人留学生が主催する企画も含む)し、実施の為の助成金を支給した。すべての企画は令和２年の1月～12月を実施期間とし、成果はWeb上にアーカイブしていく。

また、本プロジェクトは、2019年度および2020年度に、文化庁の「日本博を契機とする文化資源コンテンツ創成事業イノベーション型プロジェクト」の採択を受けた。

○　地域社会に貢献する藝大力を今後も発揮していただきたい。

○　消えゆく地方の文化を残すべく、藝大と地方自治体で人材育成等を連携していきたい。

（平成３１年３月２１日　第６７回経営協議会）

（「東京2020復興のモニュメント」ワークショップを開催）

令和元年度、本学の学生と被災地の中高生による「東京2020復興のモニュメント」のワークショップを、福島県立安積黎明高校、宮城県気仙沼向洋高校、岩手県立大槌高校において開催した。このワークショップは、「日本博」の事業として文化庁協力のもとで実施したものであ

り、東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会、東京都、岩手県、宮城県、福島県、株式会社LIXIL等と連携し、本学の学生と被災地の中高生によるワークショップを通して、仮設住宅で使用した窓などのアルミ建材を再利用し、被災地支援への感謝や大会に出場する選手への応援のメッセージを載せたモニュメントを制作した。

（大学院映像研究科の参画による鹿児島市シティプロモーションアニメの制作）

令和元年度、東京藝術大学大学院映像研究科グループにより、鹿児島市のシティプロモーションアニメ「火山の妖精“さつマグニョン”～未来のタマゴ篇～」を制作、公開した。この動画は、アニメーションと実写を織り交ぜた作品となっており、登場する火山の妖精“さつマグニョン”の監督とキャラクターの原案を、それぞれ大学院映像研究科の修了生が担当した。桜島から誕生した火山の妖精“さつマグニョン”が、みんなで助け合いながら暮らしている様子をアニメーションで表現し、そして、アニメーションの世界から現代の鹿児島市の実映像へとつなぎ、未来を育む“市民の温かい気持ち”などを表現した作品となっている。

（長崎県との連携協定の締結）

令和２年２月、東京藝術大学は長崎県と、県及び大学包括的な連携のもと、相互に連携・協力し、活力ある地域づくりや人材育成・交流を図り、地域社会の発展に寄与することを目的として、連携・協力に関する基本協定を締結した。